

ICCT-2014 報告

第 23 回 IUPAC 化学熱力学国際会議 (ICCT-2014) が 7 月 24 日から 8 月 1 日の日程で南アフリカ共和国, ダーバンの国際会議場において開催された。ICCT 史上発のアフリカ大陸での開催ということで南アフリカの化学技術者団体 South African Institution of Chemical Engineers (SAIChE) の定例会議とのジョイント開催という形が取られた。ダーバンは南アフリカで第 2 の人口を持つ港湾都市で、インド系の住民が多い。このため、会議中に提供された食事もカレー料理が多かった。

会議後に送られてきた参加者名簿によると、参加者は 22 개국から 309 名、このうち日本からは 8 名で、アフリカ大陸からの参加者が 217 名を数えた。27 日のウェルカム・レセプションの前に開催された International Association of Chemical Thermodynamics (IACT) の幹事会での組織委員長 D. Ramjugernath 教授の言によれば、5 月下旬に入国に関わる規則が改正されたことが影響して数十人規模のキャンセルが発生し、会議の会計にもかなりの影響が出たという。

27 日はウェルカム・レセプションのみで、1910 年建築のネオルネッサンス様式の City Hall に会場を移して開催された。食事とおいしい南アフリカ産ワインが振る舞われ、打楽器の合奏が披露された。28 日から 31 日まで、毎朝はじめは全体講演、休憩を挟んでパラレルセッションという構成 (30 日最後はポスターセッション, 31 日午後はエクスカーション) であった。最終日の 1 日は朝一番にパラレルセッションがあり、その後、パネルディスカッションが行われて閉会となった。毎日セッションが明るい内に終わったが、これは治安面への配慮 (あるいは、それに関連した常識) によるものと思われる。

全体講演は全部で 9 件であり、このうちの 1 件は IACT が授与する最高の荣誉である Rossini Lecture (Rossini Lectureship Award という賞の受賞講演) である。今回は、わが国にも何度も来日してお馴染みの米国 NIST の M. Frenkel 博士が A Never-Ending Search for the Truth: Thermodynamics in the Uncertain Era of the Internet と題して講演された。講演で、自分に影響を与えた恩師・友人の一人として故 阿竹徹先生が紹介されたのは、門下生として嬉しいことであった。

一般講演が発表されたパラレルセッションは以下の題目に分類されていた (あえてアルファベット順にする):

Bioprocessing
 Biothermodynamics
 Databases and Mining
 Education
 Emerging Chemical Engineering
 Experimental Thermodynamics
 Experimental and Theoretical Thermodynamics
 Fluorine Process Engineering
 Fundamentals of Chemical Engineering: Process Modeling

Fundamentals of Chemical Engineering:
 Process Simulation and Synthesis
 Gas Hydrates
 Ionic Liquids
 Thermodynamics of Materials
 Thermodynamic Modeling
 Phase Equilibria
 University/Industry Research Project and Partnership
 Separation Technology
 Sustainable Engineering
 General

応用的観点が前面に出ていたことが明らかであろう。つくばでの ICCT-2010 以来 3 度連続で熱力学教育に着いての全体講演を行った P. W. Atkins 教授は、その講演の中でも (その後の会話でも)、「完全に应用指向だ」と話されていた。個人的には、普段聞くことの少ない工学的な話を聞く機会を得たことを半分喜びつつ、自信の興味から



は遠く身の置き場に困る感覚が半分、という按配であった。しかし、应用指向が前面に出たのも、SAIChE とのジョイント開催であることと、(南アフリカ自体は経済的にも文化的にも欧米と近い立場にあるが) アフリカという土地柄を反映していることを考えれば合点がいく。実際、参加者の 2/3 を占めたアフリカからの参加者の表情は大変明るく、それぞれの講演に対する関心も非常に高かった。応用面が強く出たとはいえ、彼の地での化学熱力学の発展を考えると、今回の開催は大成功と評価すべきであると思われる。

31 日午後のエクスカーションは 5 コース (ダーバン市内観光、郊外の自然と文化に親しむ訪問、水族館訪問、野生保護区訪問、郊外の自然と N. マンデラ氏捕縛地訪問) が用意され、あらかじめ各人が予約したコースでアフリカ訪問を堪能した。実の所、治安面に不安がある国なので、ほとんどホテルと会議場を往復しただけであったから、キリンやサイがアフリカの風景に見事にマッチしているのは非常に印象的であった。

IACT の次期 Chair は Imperial College の M. Trusler 教授に決定しており、次回の 2016 年の ICCT は L. X. Sun 教授を組織委員長に中国・桂林での開催が予定されている。2018 年については IACT の幹事会ではヨーロッパでの開催などが話題に上った。

(筑波大学 齋藤 一弥)